

日本語の存在型アスペクト形式の構文

益岡隆志

1 はじめに

アスペクト

事象（出来事）の時間的展開における捉え方を表す述語（動詞）の形
Comrie (1976)、Dahl (1985)

perfective（完了相）vs. imperfective（非完了相）

日本語のアスペクトを表す動詞の形

スル・シタ（完成相）vs. シテイル・シテイタ（継続相）

奥田（1977, 1988）、鈴木（1979）、工藤（1995, 2014, 2025）

益岡（2000, 2019）

スル・シタ（完成相）vs. シテイル・シテイタ・

シテアル・シテアッタ（継続相）

本発表の目標

日本語の「ナル・スル並立」という特性が存在型アスペクト形式の
構文のあり様（体系）に深く関わることを示し、併せて、アスペクトが
文法関係（主語・目的語）を基盤とする文法現象であることを指摘する。

以下の構成

第 2 節：ナル・スルの並立と存在動詞の分化

第 3 節：存在型アスペクト構文

第 4 節：存在型アスペクト構文の体系

第 5 節：おわりに

2 ナル・スルの並立と存在動詞の分化

日本語のヴォイスの基盤をなす「ナル・スル並立」(益岡 (準備中 a))

それを象徴的に表す存在動詞アル・イルの区別

2.1 ナル・スルの並立

ナル (HAPPEN) とスル (ACT) の並立

(1) 容疑者が警察に捕まった。[ナル]

(2) 警察が容疑者を捕まえた。[スル]

佐久間 (1941)・三上 (1943, 1953) の「能動詞」・「所動詞」

言語研究：非能格動詞・非対格動詞 (Perlmutter (1978)、Van Valin (1990)、影山 (1996, 2001)、岸本 (2005, 2024))

ナル (所動)・スル (能動) の区別は本来的には動的動詞を対象とするものであるが、佐久間 (1941)・三上 (1943, 1953) は状態動詞である存在動詞にアル (所動)・イル (能動) の対立が認められると主張した。これは何を意味するのだろうか。

2.2 存在動詞アル・イルの分化

状態動詞を代表する存在動詞にアル・イルの対立が認められるのは、日本語のナル・スル並立という特性を反映するものと解される。

アル・イルに関する佐久間 (1941)・三上 (1943, 1953) の見方の修正

アルは所動詞でよいが、イルは能動詞・所動詞の両用と見る必要がある (cf. 工藤 (2004))。

所動のアル (“静態的な存在物”) — 所動のイル (“静態的な存在者”) — 能動のイル (“活動的 (動態的) な存在者”)

(3) あそこに駐車場がある。

(4) あそこに人がいる。

(5) 私はもうしばらくここにいます。

存在動詞イルの史的变化：能動詞→所動詞 (cf. 金水 (2006))

3 存在型アスペクト構文

3.1 状態化

状態動詞による動的事象の状態化（cf. 金水（1999, 2006）、野村（2003, 2015））

状態動詞のなかの存在動詞イル・アルを動的動詞に付加

「存在型アスペクト形式」のテイル・テアル

[注]「存在型アスペクト形式」という用語は金水（2006）に拠る。同じ趣旨のものに、工藤（2004, 2014）の「存在動詞の文法化」によるアスペクト形式という捉え方がある（福嶋（2025）も参照）。

テイル・テアル自体は述語（動詞）の形の問題であるが、文におけるこれらの形式の振る舞いを見るためには、テイル・テアルを軸とする「構文」として捉える必要がある（cf. 益岡（2000）、金水（2000）、野村（2003, 2015）、高見・久野（2006, 2014））。

⇒「存在型アスペクト構文」：テイル構文とテアル構文

テイル構文とテアル構文のあいだには密接な関係がある。

◇両者の共存

- (6) 所在地が書いてあった。写真も複数、添えられていた。しかし、何の心当たりもない、知らない人の名前も書かれていた。（朝日新聞 2025 年 1 月 3 日）

同類の事態をテイル構文（「書かれていた」）とテアル構文（「書いてあった」）で記している。

◇ラレテイル構文（「受動テイル構文」）のテアル構文への交替可能性

- (7) 所々で木の板がはがれかけた壁には、「呉 YWCA」の看板が掲げられていた。（朝日新聞 2025 年 2 月 25 日夕刊）

→所々で木の板がはがれかけた壁には、「呉 YWCA」の看板が掲げてあった。

3.2 存在型アスペクト構文の基本用法と派生用法

工藤（1995）の分析

シテイルの「アスペクト的意味」における「基本的意味」と「派生的意味」の区別

存在型アスペクト構文の基本用法と派生用法ーテイル構文の場合ー

◇基本用法：進行、結果

(8) 住民が協力し合って家を建てていました。[進行]（朝日新聞 2025 年 2 月 5 日）

(9) デパートから地下鉄に降りようとしたら、エスカレーター前で大渋滞が起きていた。[結果]（朝日新聞夕刊 2025 年 2 月 12 日）

[注] 進展（「ツツアル」）

(i) トランプ氏は関税を駆使した交渉に自信を深めている。（朝日新聞 2025 年 2 月 5 日）

◇派生用法：反復、パーフェクト、属性

(10) トランプ氏は...輸入する半導体や医薬品に関税をかける方針をくり返し表明している。[反復]（朝日新聞夕刊 2025 年 4 月 15 日）

(11) 21 年には三菱電機も家電量販店への出荷の終了などを公表している。[パーフェクト]（朝日新聞 2025 年 2 月 5 日）

(12) 八雲は、...五感すべてを使って、物事を観察し、本質を探ることにたけていました。[属性]（朝日新聞夕刊 2024 年 10 月 29 日）

[注] 事象による属性の含意（益岡（2021））

(i) イチローは何度も函館を訪れた。

3.3 テイル構文の基本用法と「テイル」という形

進行・結果というアスペクト的意味がなぜ「テイル」という形によって表せるのか？

cf. 野村 (2003, 2015)、Kageyama (2021)・影山 (2021)

ヒト・モノの存在からコトの存在へ

- (13) あそこに車がある。
- (14) あそこに車が止まっている。
- (15) あそこに車が止めてある。

◇ヒト・モノの存在：空間的存在表現

当該のヒト・モノが当該の空間のなかに存在する

⇒ヒト・モノを特定の空間に位置づける（「空間存在構文」（益岡（準備中 b）））

◇コトの存在：時間的存在表現（存在型アスペクト構文）

当該の一時的状態が当該の動的事態の時間的展開のなかに存在する

⇒当該のコトをその時間的な展開のなかに位置づける

「テイル」という形

[動詞のテ形+イル] という構成

そのなかの動詞テ形に対する益岡 (2014) の分析

「[中立形]（準語幹形）+テ」 という構成：「連用関係表示」

「P テ Q」：連用関係のなかの「継起関係」の表示

P の実現後に Q が実現 という意味

[注] 補助動詞構文の多様性に留意する必要がある。

p の実現後ということを時間的展開の局面として捉えると、p の動きの開始後の局面と p の動きの終了後の局面の2つが重要な局面として認められる。

◇動きの開始後の局面

当該の一時的状態が動きの開始後の局面に存在する

⇒動作継続（進行）というアスペクト的意味を表す

[進行] 動的過程の内部での状態を表し、外部の状態に比べて動態的である

◇動きの終了後の局面

当該の一時的状態が動きの終了後の局面に存在する

⇒結果継続（結果）というアスペクト的意味を表す

[結果] 動的過程の外部での状態を表し、静態的である

4 存在型アスペクト構文の体系

テイル構文とテアル構文からなる体系（益岡（2000, 2019））

4.1 テイル構文の基本用法

(a) 進行（他動詞、能動自動詞）、(b) 主体の結果（所動自動詞）

（cf. 工藤（1995））

(a) 進行

◇他動詞

(16) 近所の人が車を車庫に入れていた。

(17) 妻は台所で音を立てている。（松本清張『時間の習俗』）

◇「能動自動詞」

(18) 技術系社員だった男性は 90 年代、奈良県天理市の液晶工場
で働いていた。（朝日新聞 2024 年 9 月 25 日）

(19) 一人の中年男が... 西の山麓に向かって歩いていた。（松本清
張『陸行水行』）

[注] 非典型的な例

(i) 山頂が、まっしろに、光りかがやいていた。（太宰治『富
獄百景』）

(b) 主体の結果

◇「所動自動詞」

(20) 雨が止んでいた。

(21) 三人の男は、やはり憔悴していた。(松本清張『万葉翡翠』)

[注] 所動他動詞

(i) あの人はやる気をなくしている。

他動詞の受動テイル構文：進行・結果

(22) 目の前で警備員が群衆に押されていた。[進行]

(23) 建物の窓は雪で塞がれていた。[結果] (湯目英郎『ワインの話』)

(24) 海を見ると、氷の岸につけてあったウミアック (ボート) が、もう二〇メートルほど岸を離れて流されている。(本田勝一『カナダ・エスキモー』)

文レベルでは結果の意味も考えられるが、当該の文脈では進行の意味と解される。

他動詞の受動テイル構文 vs. 他動詞のテイル構文

(25) 室内が荒らされている。[結果>進行]

(26) 室内を荒らしている。[進行>結果]

4.2 テアル構文の基本用法

客体の結果：場面描写

益岡 (1984) の「A 型」(「受動型」)

表面上は主体結果相の形を取る⇒副次的にヴォイスの面を持つ

(27) 部屋の隅にこの前やっと月賦がすんだばかりのテレビが据え
てある。(松本清張『時間の習俗』)

(28) それが、いつの間にか磨いてあるのに気づいた。(柴田翔『立ち盡す明日』)

cf. 益岡 (1984) : 派生用法の「B 型」(「能動型」)

パーフェクトを表す

(29) 大使館員の話では、古河健志は荷物も所持金も一切をレイク

サンドのホテルに残してあったという。(平岩弓枝『湖水祭』)

- (30) 制作協力を願い、自作の脚本を渡してあった。(朝日新聞
夕刊 2025 年 7 月 28 日)

- (31) 家人には正午まで寝むと云ってあるから、…。(山崎豊子
『沈まぬ太陽』)

A 型は「A1 型」と「A2 型」に分けられる

◇A1 型：対象の移動（位置変化）の結果としての空間存在（状態変化
の面もある）

配置動詞

- (27) 部屋の隅にこの前やっと月賦がすんだばかりのテレビが据
えてある。(松本清張『時間の習俗』)
- (32) うしろのトランクに鈴とわらじが入れてある。(司馬遼太郎
『空海の風景』)
- (33) 墓石の前には、写真にあるような、小さなベッドほどの大
きさの大理石が敷かれていて、その上には二本の小さな赤
いバラが供えてあった。(村上春樹『ザ・スコット・フィッ
ツジェラルド・ブック』)

作成動詞

- (34) 封書の裏には、堂々と彼の名前が書いてある。(松本清張
『寒流』)
- (35) それぞれの章のあとに執筆の日時が左記のように記してあ
る。(池田満寿夫『私のピカソ 私のゴッホ』)
- (36) 前の建物が桃色がかった石をつみかさねて建ててある。(遠
藤周作『死海のほとり』)

◇A2 型：対象の状態変化の結果

- (28) それが、いつの間にか磨いてあるのに気づいた。(柴田翔
『立ち盡す明日』)

(37) 製菓用のチョコレート 50g が細かくけずってあります。

(NHK「きょうの料理」2024年12月17日放送)

(38) 五徳の火口の真上の部分が切り取っており、…。(石毛直道『食卓の文化誌』)

テイル構文について：

他動詞・能動自動詞のテイル構文が進行を表す点は、2.2 で述べた能動のイルの“動態性（活動性）”を反映するものであり、理にかなっている。

テアル構文について：

基本用法と派生用法がそれぞれ受動の構文と能動の構文を形成する点においてヴォイスが深く関与する。

4.3 テイル構文とテアル構文の関係のあり様

テイル構文とテアル構文がともに結果（結果相）を表す点は、所動のイルとアルの“静態性”を反映するものと言えるが、テイル構文とテアル構文がそれぞれ主体（主語）の結果状態と客体（目的語）の結果状態を表す点は説明を要する。

所動詞構文における主体（主語）と他動詞構文における客体（目的語）

所動詞構文の主体（主語）と他動詞構文の客体（目的語）は、「非行為者」（NON-ACTOR）であるという点は共通しているが、「自発者」（HAPPENER）と「被動者」（PATIENT）という点で性質を異にしている。「被動者」が動作を受けるという被動的な性格を持つのに対して、「自発者」は被動的な性格は弱く、ナル（HAPPEN）の主体としての自発性（“ひとりでに”）を持つものと考えられる。

2.2 で述べたように、所動のイルとアルはどちらも“静態的”ではあるものの、イルは“存在者”を表す点でアルに比べると能動詞寄りであり、能動性を完全には払拭していない。イルとアルの対立において、イ

ルの静態性はアルに比べて相対的に弱いと言える。テイル構文が「自発者」の結果状態を表し、テアル構文が「被動者」の結果状態を表す（その逆ではない）という点には、イル・アルのこのような対立のあり様から見ると一定の理が認められる。

テイル構文とテアル構文の役割分担（棲み分け）

他動詞構文（工藤（1995, 2014, 2025）の「主体動作客体変化」の構文、影山（1996, 2001）の「達成動詞」の構文）において、主体（主語）が指向するアスペクト的意味と客体（目的語）が指向するアスペクト的意味が区別して表される。すなわち、主体（主語）が指向する進行相はテイル構文により、客体（目的語）が指向する結果相はテアル構文により、それぞれ表される。

このように、テイル構文とテアル構文の関係性は他動詞構文において明確に現れる。

[注] 所動（ナル）と能動（スル）の対立の構図

所動のプロトタイプと能動のプロトタイプの対立（cf. Lakoff（1977）、Goldberg（1995））

継続相の表現においてテアル構文がテイル構文を補完する役割を担うことから、テイル構文とテアル構文は継続相の主要形式（一次的形式）、副次的形式（二次的形式）として認定される（益岡（2000, 2019）cf. 金水（2000, 2006））。

5 おわりに

本発表では、日本語の存在型アスペクトの表現を対象に文法の体系性のあり様を探り、日本語において存在表現とアスペクト表現のつながりが認められることを指摘した。

要点

(a) 文における存在型アスペクト形式の振る舞いを見るためには、

「構文」として捉える必要がある。

- (b) 存在動詞イル・アルの能動性と所動性は連続的な関係にある。
- (c) 存在型アスペクト構文には動詞のテ形が深く関与する。
- (d) 存在型アスペクト構文を構成するテイル構文とテアル構文のあいだには密接な関係性が認められる。
- (e) アスペクトは文法関係（主語・目的語）を基盤とする文法現象であり、テンスだけでなくヴォイスにも関係する。

[参考文献]

- 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」『教育国語』53号・54号。
- 奥田靖雄（1988）「時間の表現（1）・（2）」『教育国語』94号・95号。
- 影山太郎（1996）『動詞意味論一言語と認知の接点一』くろしお出版。
- 影山太郎（2001）「自動詞と他動詞の交替」影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店。
- 影山太郎（2021）『点と線の言語学一言語類型から見た日本語の本質一』くろしお出版。
- 岸本秀樹（2005）『統語構造と文法関係』くろしお出版。
- 岸本秀樹（2024）「構文と格」加賀信広・岸本秀樹『文の構造と格付与』開拓社。
- 金水敏（1999）「近代語の状態化形式の構造」近代語学会編『近代語研究』10巻。
- 金水敏（2000）「時の表現」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 2：時・否定と取り立て』岩波書店。
- 金水敏（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房。
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
- 工藤真由美（2004）「研究成果の概要」工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系一標準語研究を超えて一』ひつじ書房。
- 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房。

- 工藤真由美（2025）『文と時間—日本語のテンポラリティとタクシス—』
ひつじ書房。
- 佐久間鼎（1941）『日本語の特質』育英書院。
- 鈴木重幸（1979）「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた
完成相の叙述法断定のばあい—」『形態論・序説』（むぎ書房、1996 年）
所収。
- 高見健一・久野暉（2006）『日本語機能的構文研究』大修館書店。
- 高見健一・久野暉（2014）『日本語構文の意味と機能を探る』くろしお出版。
- 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」『国語国文』72 卷
8 号。
- 野村剛史（2015）「現代日本語動詞のアスペクト体系」『国語と国文学』
1101 号。
- 福嶋健伸（2025）『中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系
—古代から現代までの変遷を見通す—』三省堂。
- 益岡隆志（1984）「「-てある」構文の文法—その概念領域をめぐって—」
『言語研究』86 号。
- 益岡隆志（1987）「他動表現のアスペクト」『命題の文法』（くろしお出版）
所収。
- 益岡隆志（2000）「アスペクトをめぐって」『日本語文法の諸相』（くろしお
出版）所収。
- 益岡隆志（2014）「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」益岡隆志
他編『日本語の複文構文の研究』ひつじ書房。
- 益岡隆志（2019）「日本語の存在型アスペクト形式とその意味」岸本秀樹・
影山太郎編『レキシコン研究の新たなアプローチ』くろしお出版。
- 益岡隆志（2021）『日本語文論要綱—叙述の類型の観点から—』くろしお
出版。
- 益岡隆志（準備中 a）「構文から見た日本語のヴォイス体系」
- 益岡隆志（準備中 b）「ニガ構文における意味的拡がり」
- 三上章（1943）「用言の種類」『国語研究』11 卷 3 号、国語学研究会。
- 三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院（くろしお出版復刊、1972 年）。

- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen (1985) *Tense and Aspect Systems*. Oxford: Basil Blackwell.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kageyama, Taro (2021) Between lexical verbs and auxiliaries: The architecture of Japanese verb-verb complexes. In Taro Kageyama, Peter E. Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George (1977) Linguistic gestalts. *Papers from the 13th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*. University of Chicago.
- Perlmutter, David (1978) Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Berkeley Linguistics Society* 4. University of California, Berkeley.
- Van Valin, Robert D. (1990) Semantic parameters of split intransitivity. *Language* 66 (2).